



Data

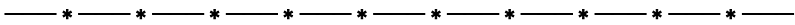
監督：本田猪四郎（本編）
円谷英二（特撮）
脚本：村田武雄、本田猪四郎
原作：香山滋
出演：宝田明／河内桃子／平田昭彦
／志村喬／村上冬樹／堺左
千夫

👁️👁️ みどころ

1954年に961万人を動員した『ゴジラ』は単なる怪獣映画ではなく、同年に起きたビキニ環礁の水爆実験や第五福竜丸の沈没にヒントを得た社会問題提起作！

東京のまちを破壊しつくす太古生物「ゴジラ」も、水爆実験のため長い眠りから否応なく目覚めさせられ、放射能をいっぱい浴びてしまった被害者なのだ。そんな視点から、「ゴジラ」を考えてみると・・・。

60年、今昔。ハリウッド版『GODZILLA』との対比が不可欠だが、もし今年の夏、東京湾に「GODZILLA」が現れたら、その対処法は？それは、60年前と同じ？それとも・・・？



■60年を経て、ゴジラvsGODZILLA■

私が今日東宝試写室で観たのは、1954年に日本で公開され、観客動員数961万人に上ったという初代、日本版『ゴジラ』のデジタルリマスター版。それから60年後の2014年、事務所に戻って夕刊を広げると、そこには5月16日に全米で公開されたハリウッド版『GODZILLA』が「伝説継ぐ暴れっぶり」で、週末の推定興行収入が約200億円になったことが報じられていた。本日の試写ではその『GODZILLA』の予告編も上映されたが、初代『ゴジラ』に本格的な「ぬいぐるみ怪獣」として登場した「ゴジラ」の外観は、60年後のハリウッド版『GODZILLA』でも全く同じ。とは言っても、まさかハリウッド版『GODZILLA』の中に人間が入ってるはずはなく、精巧なメカニズムで動いてるはずだ。

1945年の敗戦から2015年の来年には、日本は戦後70年を迎える。また、1952年4月28日のサンフランシスコ講和条約発効から63年、1960年の日米安保条約締結から55年を迎える。政治的、経済的、軍事的、外交的にそんなフレームで語られることが多くなった昨今、初代の1954年版ゴジラから、最新の2014年ハリウッド版『GODZILLA』まで60年。今年の夏は、その対比をしっかりとやりたいものだ。

■ゴジラのヒントは、水爆実験と第五福竜丸に！■

2014年の今年には第1次世界大戦が始まった1914年から100年にあたるため、その当時との比較がなされているが、今から60年前の1954年に初代『ゴジラ』が誕生したヒントは一体どこに？それは、1954年に行われたビキニ環礁での水爆実験と、第五福竜丸の沈没事故が大きな社会問題になったことだ。今の子供はもちろん、大人でさえ「ゴジラ」はその後ライバル(?)として次々と登場した「モスラ」や「ラドン」と同じような単なる「怪獣」と思っているだろうが、本作を観れば、なぜ太古生物であるゴジラが東京湾に現れてきたのがよくわかる。それは、ビキニ環礁での度重なる水爆実験によって、それまで安穩に暮らしていた海底での生活が脅かされたためだ。したがって、本作最大のポイントは、ゴジラも水爆実験の被害者だということにある。去る4月16日に起きた韓国の大型旅客船セウォル号の沈没事故は不可抗力による事故ではなく明らかに「人災」だが、1954年に大量の放射能を浴びる被害を出した第五福竜丸の悲劇も人災だし、ゴジラの出現も人災なのだ。

本作導入部にみる、太平洋洋中で相次ぐ謎の船舶遭難事故の原因はナニ？それは近海の島に伝わる伝説によれば、「ゴジラ」のせいらしい。また、古生物学者である山根恭平博士(志村喬)の説では、「太古の昔から海底に生息していた生物が度重なる水爆実験で目覚め、暴れている」らしい。最初はそんな話を聞いても誰も信じなかったが、被害調査のために赴いた大戸島の中で山根博士たち調査団をはじめ、たくさんの島の人々がはっきりゴジラの顔を目撃したから、ゴジラの「出自」は次第に明らかに。日本は火山列島だから、地震や津波の危険といつも鉢合わせなのは仕方がないが、あんな怪獣が東京湾の底に眠り、いつでも自由に散歩をするべく東京湾に入り込んでくる可能性があるとなれば、さて国民の命と財産に責任を持つべき国の対処方法は・・・？

■ゴジラのヒントは、水爆実験と第五福竜丸に！■

2014年の今年には第1次世界大戦が始まった1914年から100年にあたるため、その当時との比較がなされているが、今から60年前の1954年に初代『ゴジラ』が誕生したヒントは一体どこに？それは、1954年に行われたビキニ環礁での水爆実験と、第五福竜丸の沈没事故が大きな社会問題になったことだ。今の子供はもちろん、大人でさえ「ゴジラ」はその後ライバル(?)として次々と登場した「モスラ」や「ラドン」と

と同じような単なる「怪獣」と思っているだろうが、本作を観れば、なぜ太古生物であるゴジラが東京湾に現れてきたのかがよくわかる。それは、ビキニ環礁での度重なる水爆実験によって、それまで安穩に暮らしていた海底での生活が脅かされたためだ。したがって、本作最大のポイントは、ゴジラも水爆実験の被害者だということにある。去る4月16日に起きた韓国の大型旅客船セウォル号の沈没事故は不可抗力による事故ではなく明らかに「人災」だが、1954年に大量の放射能を浴びる被害を出した第五福竜丸の悲劇も人災だし、ゴジラの出現も人災なのだ。

本作導入部にみる、太平洋洋で相次ぐ謎の船舶遭難事故の原因はナニ？それは近海の島に伝わる伝説によれば、「ゴジラ」のせいらしい。また、古生物学者である山根恭平博士（志村喬）の説では、「太古の昔から海底に生息していた生物が度重なる水爆実験で目覚め、暴れている」らしい。最初はそんな話を聞いても誰も信じなかったが、被害調査のために赴いた大戸島の中で山根博士たち調査団をはじめ、たくさんの島の人々がはっきりゴジラの顔を目撃したから、ゴジラの「出自」は次第に明らかに。日本は火山列島だから、地震や津波の危険といつも鉢合わせなのは仕方ないが、あんな怪獣が東京湾の底に眠り、いつでも自由に散歩をするべく東京湾に入り込んでくる可能性があるとするれば、さて国民の命と財産に責任を持つべき国の対処方法は・・・？

■□■ゴジラを契機に自衛隊を考えよう■□■

現在、安倍総理の悲願の一つである「集団的自衛権」の議論が始まっているが、もし憲法解釈でそれが認められれば、自衛隊はどこまでの行動が認められるの？その議論を本格的に展開するのはいいことだ。戦後69年間全く戦争と縁のない状態で平和を享受することができた日本では、憲法第9条第2項が「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」と定めているにもかかわらず、自衛隊は明確な戦力であることを、無理矢理解釈でごまかしてきた。そして、「災害救助」における自衛隊の役割ばかりが強調されている。しかし、自衛隊の是非は憲法第9条のあり方そのものとして議論すべきが当然だ。

そんな目で1954年の『ゴジラ』を観ると、中盤以降ゴジラ退治に大きな役割を果たすのが、自衛隊に移行する直前の保安隊だ。「東京湾にゴジラ現る！」そんな脅威の前に山根博士の「水爆実験の中でも生き延びてきたゴジラの生命力を学問的見地からしっかり研究すべきだ」との冷静な意見は完全に無視され、政府が主導する議論は、いかゞしてゴジラを退治すべきかの方向一色になっていった。

日本が戦争に負けた当時の東京は焼け野原だったことを考えれば、それから9年後の1954年の東京の復興ぶりは本作を観れば、そのすばらしさがわかる。そのうえ、この時点でゴジラ退治のために、東京湾に「万里の長城」のような高電圧を流した鉄条網を築いたり、ゴジラ退治のための戦車や銃器の総動員ぶりをみれば、日本国の戦後復興のスピードと鮮やかさがよくわかる。本作でゴジラ退治のために活躍しているのは自衛隊。60年

ぶりのデジタルリマスター版の本作を観ている人はそう思うかもしれないが、1954年3月に結ばれた「日米相互防衛援助協定」を受けて、自衛隊法と防衛庁設置法が成立したのは、1954年6月。そして、陸上自衛隊、海上自衛隊、航空自衛隊の管理・運営を行う防衛庁が発足したのは同年7月だ。すなわち、憲法第9条の改正問題を考える場合いつも問題になるように、戦後の日本では、1950年8月10日に施行された警察予備隊令が講和条約発効から180日後に失効するため、政府は1952年7月に保安庁法を成立させた。これによって約2ヵ月半の期間を経て、警察予備隊は保安隊に改編され、保安庁の司令部にあたる第一幕僚監部のもとに、第一管区隊から第四管区隊にわけて「保安隊が配置」されることになったわけだ。

本作導入部では、太平洋沖で続く度重なる船舶遭難事故への対応や、「ゴジラ現る！」の報に接して国民の生命と財産を守るべくその全力を注入する「保安隊」の姿が見えるので、その役割をしっかりと頭に刻みつけたい。そして、それと同時に、保安隊の火力（戦力？）をゴジラ退治に向けることの是非についても、しっかりと検討したい。

■□■ 芹沢博士の新発見は、オボちゃんの新発見以上！ ■□■

STAP細胞の発見によって、一時は「リケ女の花」のようにもてはやされた理化学研究所のオボちゃんこと小保方晴子博士は今、失意の日々を送っている。また、その上司を含む理化学研究所そのものの研究体制がいかにデタラメなものであったかについても、日々攻撃のネタとされている。STAP細胞の発見がホントにノーベル賞にも値する世紀の大発見なのか否かは今後の検証を待たなければならないが、本作にみる芹沢大助博士（平田昭彦）の発明したオキシジェン・デストロイヤーはこれぞまさに世紀の大発見だ。

芹沢博士の右目が黒い眼帯で覆われているのは、私が小学生の時に観た片岡千恵蔵が『七つの顔の男』で演じた、「ある時は片目の運転手、またある時は〇〇、そしてある時は△△・・・」のセリフで有名な多羅尾伴内のマネをしたわけではなく、戦争に従事したときの傷あとらしいから、それを見ただけでも本作の時代背景がわかろうというものだ。

それはともかく、「ゴジラ抹殺」という「特別災害対策本部」を実現するべく方策を練っていた毎朝新聞記者の萩原（堺左千夫）が、ゴジラ対策に有効なプランを持っていると噂される青年科学者・芹沢の研究所を訪ねたところから、中盤の物語が急展開していくことになる。萩原の熱意にもかかわらず芹沢は萩原を追い返したが、戦争で片目を失ったため山根の一人娘である恵美子（河内桃子）との婚約を解消し、一人自宅の研究所に籠もって芹沢が進めていた研究は一体ナニ？ 芹沢は萩原を追い返した後「絶対、秘密を守ってくれるね」と念を押した後、恵美子を連れて、理研の豪華な研究所とは程遠い、自宅のちっぽけな研究室に入り、魚の入った水槽の中に、ある物質（＝オキシジェン・デストロイヤー）を入れると、恵美子の目の前に広がった、恐るべき風景とは・・・。

■□■これぞ科学者の鑑！しかし、現実は・・・■□■

本作のストーリー展開上の主人公は、南海サルベージKKの所長で、現在の恵美子の婚約者である尾形秀人（宝田明）。しかし、後半からクライマックスにかけての、手に汗握る展開（？）のカギを握る男は、芹沢博士になる。昔から「これは絶対秘密だぞ」という秘密が守られることは稀で、その約束が反故にされるどころからストーリーが急展開してることが多い。本作も、まさにそれだ。元婚約者とはいえ、そもそも何故、芹沢が恵美子にオキシジェン・デストロイヤーの威力を見せたのかについては少し疑問があるが、そこで交わした「恵美子さん、これは絶対内緒だよ」の約束が破られ、オキシジェン・デストロイヤーの威力を尾形が知ったところから、芹沢の科学者としての苦悩が現実になっていく。

オキシジェン・デストロイヤーとは、水中の酸素を一瞬にして破壊し、あらゆる生物を死滅させ溶解する水中酸素破壊剤。これを水槽の中に投入すると、水槽の中にブクブクと泡が広がる中、泳いでいた魚はたちまち底に沈み、しばらくすると骨の残骸のみに。これを海底に潜むゴジラの側に行くと大量に散布すれば、いかに強力な放射能を帯び、火力部隊や戦車の攻撃にピクともしないばかりか、口から吐く白熱光で東京のまちを破壊し尽くした凶暴なゴジラだって……。それが、国民の生命を守ることを第一義的に考える尾形の主張だったが、自ら開発したオキシジェン・デストロイヤーのすさまじい威力を知っている芹沢の見解は違っていた。芹沢が心配したのは、「オキシジェン・デストロイヤーのような恐ろしい能力をもった新発明が、原子爆弾と同じように万一殺傷兵器として使われたら……」というものだ。今回ゴジラに対してオキシジェン・デストロイヤーが有効だということが実証されたら、人類はきつといつかそれを悪用するのでは……？そう考えた芹沢は、科学者としての良心から小保方博士とは正反対に（？）科学者としての名誉を求めることをあきらめ、自分の研究を永遠に闇の中に葬り去る決心をすることに。スクリーン上に見る2人の議論は結局オキシジェン・デストロイヤーでゴジラを倒すという結論になったが、そこに至るまでの芹沢博士の苦悩はいかに……。

■□■今でも鮮明に覚えているシーンを再確認！■□■

私は中学生になってからは3本立て55円という日活の専門館と、洋画の専門館に自主的に通ったが、小学生時代は当然両親に連れられて行っただけ。しかし、それでもハッキリ覚えている映画があるし、鮮明に覚えている数々のシーンがある。その1本は、ある科学者が実験の失敗の中で、巨大なタランチュラ（クモ）を生み出してしまう映画。この映画を観たあとは、家の中で足の長いクモを見ると恐怖で身体がピクッと震えるようになってしまったほどだ。その他、鮮明に覚えているシーンはたくさんあるが、本作に見る水中でのオキシジェン・デストロイヤー散布シーンもその一つだ。本作は、最初に「ゴジラ」という字幕がスクリーン上に表示された後、軽快な（？）「ゴジラのテーマ」（？）が鳴り

響く中でキャストとスタッフの字幕が表示される。この「ゴジラのテーマ」はその後28作も続いた『ゴジラ』シリーズの中でも使われていたから、耳に残っているのは当然。しかし、潜水のプロである尾形と共に、潜水ははじめてという芹沢博士が東京湾の海中に潜り、ゴジラの側でオキシジェン・デストロイヤーの装置を作動させた後自ら命綱を切るシーンを、なぜ小学生だった私が鮮明に覚えていたのだろうか。

芹沢がオキシジェン・デストロイヤーの使用を決意したのは、尾形との議論の時にたまたまテレビに映し出された被災者の姿と、乙女たちが歌う「平和への祈り」に心を動かされたため。そこで芹沢が出した条件は、「今回一度だけの使用」ということだったが、そんな約束はホントに守られるの？芹沢でなくとも、そんな疑問を持つのは当然だ。そこで芹沢は、オキシジェン・デストロイヤーの設計図を惜しげもなく燃やしてしまうと共に、完成品をここですべて使い切ることによって、オキシジェン・デストロイヤーが「悪用」されることを拒否したわけだ。子供心にそこまでの意味を理解できていたとは思えないが、今でも鮮明に覚えているこのシーンを、本作で再確認できたことに大感激！

■□山根博士の「つぶやき」をどう考える？■□

Twitterによる「つぶやき」が世の中を席卷してきたのはここ10年のことだが、本作ではゴジラ退治が終わり、東京湾と日本に平和が戻ったところで、山根博士が呟く「あのゴジラが最後の一匹だとは思えない・・・。もし水爆実験が続けて行われるとしたら、あのゴジラと同類がまた世界のどこかに現れてくるかもしれない・・・」との言葉に注目したい。これはTwitterで何万人にも「拡散」したわけではなく、人から人への口づてに伝えられる「つぶやき」だから、どこまで影響力があるのかはわからないが、私はこれを本田猪一郎監督が本作に込めたメッセージとして理解したい。1954年当時に本作を観た961万人というのは、ほぼ10人に1人だから相当な数。それだけの日本人がこのメッセージを聞き考えたわけだ。そして今、これと同じような問題が集団的自衛権や憲法改正問題として提起されている。「憲法解釈を変えれば、日本は戦争をできる国に変わってしまう」との主張に私は基本的に違和感を覚えるが、さて、あなたの意見は？

1954年の『ゴジラ』の上映から60年経ち、ハリウッド版『GODZILLA』が日本でも公開されようとしている今までに、核実験が実施された回数は数え切れない。すると、ハリウッド版『GODZILLA』が東京で上映される今年の夏には、ひょっとしたらぬいぐるみ版ゴジラから更に巨大化し精巧化した「GODZILLA」が東京湾に現れるかも？本作でゴジラによって破壊されたのは、①品川駅を走る列車や②高压鉄塔の他、③国会議事堂、④銀座和光ビルの時計塔等だったが、2014年の夏に破壊されるのは、さしずめ①横浜ベイブリッジ、②東京スカイツリー等。万一そんな事態になれば、芹沢博士のオキシジェン・デストロイヤーが存在しない今、政府（GODZILLA災害対策本部）は「GODZILLA」退治のため、一体何に頼るのだろうか・・・？

2014（平成26）年5月22日記